

四つ葉のクローバー

季刊



のたより

No.10

進化させよう！

ハードエネルギー社会からソフトエネルギー社会へ

「原発を考える会・玉川学園」

2015年7月1日発行

**ハードエネルギー社会**:化石燃料や原発に依存し環境や持続性を損なう社会  
**ソフトエネルギー社会**:省エネや太陽エネルギー等自然エネルギーに依存し、環境保全や後世に配慮する優しい持続社会

# 新しい時代へ！

## 高浜原発差し止め仮処分決定の意義

当会顧問 井野 博満

今年4月14日、福井地方裁判所が下した高浜原発3・4号機差し止めの仮処分決定は、市民の視点からの画期的判決だった。昨年5月21日の大飯原発差し止め判決に続くものである。仮処分というのは即効性があり、この決定が覆されるまでは原発を運転できない。高浜原発については、原子力規制委員会が新基準に適合していると「お墨付き」を与えているが、少なくともしばらくは再稼働できないことになった。

決定の内容も注目すべきものである。大飯原発差し止め判決を引き継いで、基準地震動の決め方が不十分なこと、外部電源や主給水ポンプは壊れていても良いとする設計がおかしいと指摘したことに加え、新規制基準は安全性を保障しないとして規制委員会批判に踏み込んだ。

この判決に対し、推進勢力は「事実認定に間違いがある、ゼロリスクを求めるのは技術を知らないからだ」などと非難を浴びせている。だが、**原発は核反応を利用する「異次元」(彼等の得意とする言葉)の技術なのだ。安全を重視する市民の立場からすれば、甚大な放射線汚染を引き起こす危険がある原発を、ほかの技術と同じに論じることの方がおかしい。**

この判決の後、鹿児島地裁では、原告の主張を退け川内原発の再稼働を認める決定がなされた。

国がお墨付きを与えた原子力専門家の判断を疑わない従来パターンでの決定である。司法が脱原発へ向かうかどうかは予断を許さない。しかし、裁判官も人間である。**福島事故を二度と起こしてはならないという国民の決意が揺らがないければ、司法は変わるであろう。**安倍内閣がいかに原発推進に舵を切ろうとも、脱原発は実現できる！**原発技術に未来はない！**

(元経済産業省原子力安全保安院「意見聴取委員会委員」、東京大学名誉教授、玉川学園在住)



# 内部被曝と子どもたちの保養

福島原発事故から早や4年数か月、政府も電力会社もまるですべての問題は終息したかのように再稼動に邁進している。私たち国民の意識も風化してきている。しかし、福島で子育てをしている母親にとっては「内部被曝」は日々の生活の中でいまだに大きな問題である。その不安の一つの解決策として「保養」（放射線から遠く離れて一定期間自然の中で過ごすこと）の取り組みを実践しているグループ、あるいはベラルーシでの歴史等を紹介したい。

## ご存知ですか？「保養」の豆知識

### なぜ保養が必要なの？

医学的には、放射能の影響が少ない地域で一定期間過ごすことによって、免疫力が大きく高まる等健康面で効果があることが分かっている。実際、**21日間**保養することにより、**内部被曝の数値が2分の1以下**になることがベラルーシのベルラド研究所の調査結果から実証されている。

### 内部被曝とは？

食べものや呼吸を通じて放射線を浴びること。外部被曝なら皮膚や衣類で遮断できる弱い放射線でも体内ではとても危険なものになる。**体内に留まっている間、同じ場所の細胞に影響を与え続ける。**

### ベラルーシの保養

29年前に起こったチェルノブイリ原発事故以来、**その被害は今も「現在進行形」**。事故との因果関係ははっきり証明されてはいないが、子どもの免疫機能の低下症状、特に慢性的な疾患、内臓機能の低下を実感している子どもが多い。

ベラルーシには、放射能汚染という現実と付き合ってきた29年の歴史があり、健康を守るための検査システムや保養プログラムの取り組みには私たちが学べる部分が多い。**国内には国立の保養所が14ヶ所、3歳から18歳までの子供が利用できて全て無料。最低21日間滞在、年間4万5千人の子どもが国費で保養されている。**

### 日本の保養

1986年のチェルノブイリ原発事故の影響を受けた子ども達を日本の市民グループが保養のために受け入れをして来た。3・11以降、これらのグループが福島の子どもの保養を始め、また新たな市民グループが全国で340ほど立ち上がったが、**全体で1万人弱の子どもしか受け入れることができない**。18歳以下の子どもは**福島だけでも36万人**いる。現在、先のグループが沖縄に長期滞在できる施設をつくったり、日本の状況に合わせた保養のかたちが模索されている。

(参考資料:「小さき声のカノン」パンフレットより)

### 【日本の保養団体関連リンク集】

- \* 「311受け入れ全国協議会」(通称うけいれ全国 <http://www.311ukeire.net/>)
- \* 「子どもたちを放射能から守る全国ネットワーク」 <http://kodomozenkoku.com/>
- \* 「NPO 法人チェルノブイリへのかけはし」 <http://www.kakehashi.or.jp/>
- \* 「原子力行政を問い直す宗教者の会」 <http://mukakumuhei.com/>
- \* 「NPO 法人沖縄・球美の里」 <http://kuminosato.net/>

## 「保養レポート」

グループ「母ちゃんず」

代表 竹内 亜紀



私たちは、福島原子力発電所の事故によって高放射線下での生活を余儀なくされている福島親子を、町田市や相模原市の施設にお呼びして保養キャンプを実施している相模原

のボランティアグループです。スタッフは10人、30～40代の母親達です。

保養キャンプは放射能汚染地域から離れることで体内にたまったセシウムを排出し、体力を回復させることができます。また、子どもの心身の成長に欠かせない自然の中で遊ぶことにより、精神的ストレスを発散させることができます。自然の中で日に日に輝きを取り戻す子どもたちの姿そのものが、彼等の母親の慰めにもなります。



私たちは2012年春からキャンプを開始させ、今年の春までに10回のキャンプを行いました。延べ501名の福島の親子を4～5泊のキャンプに無料招待しました。資金は全て寄付金によってまかなわれています。また、宿泊所を町田市や相模原市が無料提供して下さっています。

福島県には地域差はありますが、未だに放射線量が高いところがあります。原発近辺だけでなく、内陸部の福島市、郡山市、二本松市、本宮市なども線量が高いところが多くあります。特に子を持つ親たちの苦悩は私たちの想像を遥かに超えます。

震災から4年経過した今でも、一日に10分しか

外遊びができない子ども達もいます。家族の健康に大きな不安を抱き、心の大きな傷を抱える福島の人々のことを思えば、自ずと私たちが人として進まなければならない道が見えてくると思います。私たちはこれからもキャンプを続けます。

(karchanz@jcom.zap.ne.jp)



その他の近隣(町田、八王子、相模原)保養活動団体：

- 「ふくはち」(福島子ども支援八王子)
- 「しのばらんど」
- 「はちみつ会」

## 四方山ばなしシリーズ No. 10

燃料再処理!? まだ遣るの?

藤井 石根

青森県の下北半島の付け根のところに六ヶ所村という村があります。そこに核燃料サイクル施設なるものが設けられています。その施設の中に核燃料再処理工場が建っています。

当初公表された工場の建設費は約7,600億円、それが6年後の1990年には2兆1,400億円と高騰しています。それでは一体、何をするための工場でしょうか。そうです想像されますように原子力発電所(以下、原発)から続々と排出されてくる使用済み核燃料から新たに誕生した放射性物質「プルトニウム」(以下、Pu)という物質を取り出す、いわばPu生産工場です。Puはもはや自然界ではほとんど存在しない地球上で一番危険な人工的な猛

毒物質、その毒性たるや角砂糖5個分もあれば日本人を全滅させられるとも言われています。ここでの代表的なPuはPu-239、その半減期は2万4千年で人の寿命からすれば半永久的な放射能物質です。また核分裂もしやすく原爆の材料にもなります。ナガサキに投下された原爆、ファットマンにもこの物質が用いられていました。

それでは工場内でどんな作業が行なわれているのか、具体的に眺めてみましょう。

ご承知の通り原発からの棒状の使用済み核燃料は膨大な放射能の塊と言えるもので、人が近づけば即死するほどの強い放射線と熱を出し続けています。これを貯蔵プールで貯蔵し、ある程度冷却させた後、燃料棒をブツ切りにし、これを高温・高濃度の硝酸に溶かし込みます。この切断で折角、燃料棒内に閉じ込められていたトリチウム・炭素14・クリプトン85や沃素129等の放射性ガスは大量に環境中に放出されてしまいます。その度合たるや原発が1年かけて出す放射能の量をたった1日で



出してしまうほどの凄さです。高さ150メートルの煙突からは送風機で通常原発の240倍もの放射性ガスが大気中に放出されてしまいます。

ところで、かの溶液には未だウランや Pu が溶け込んでいます。そこでこれらを抽出、取り出された各々の物質は脱硝酸や精製の過程を経て結果的には粉末状酸化物のかたちで回収されることになります。

他方、抽出された後の液状残渣物、これにも尚、他の多くの放射性物質が残っていますので、当然高レベルの放射性廃液です。その処理には、これに高温のガラス原料を混入させ冷やし固形化することになっています。この固形化が高レベル放射性廃棄物に該当するガラス固化体といわれるものです。当然、人間が近づけば即死させるほどの強力な放射線と熱を発する超危険な存在です。いずれにしても、こうした処置を施しても実際はなお放射性の廃液が残るわけで、これは六ヶ所村の場合、沖合い3km、深さ44mの先まで延びた配管口から計画上は毎日300トン以上の廃液が故意に海に垂れ流されることになっています。

幸いと言おうか、今のところガラス固化体の成形が技術上、うまく行っていない為、こうした放射性物質の漏洩や廃棄は本格化していません。しかしもし本稼動すれば放射能による環境汚染の程は計り知れず、また目先の経済的理由で環境負荷軽減策を随所で怠っているこの再処理工場では労働者の被曝も尋常ではありません。何せ放射能による環境汚染の度合いで見れば原発約360基分に匹敵する訳ですので、その凄さの程は容易に想像できると言うものです。これほどまでの事を

して例え Pu を取り出してみてもその使い途はありません。なにせ Pu を燃料に使う高速増殖炉「もんじゅ」は実質には技術上かつ経済上で破綻、また既に原爆5,500発分もの Pu を国内外に抱えていて、実際上は

その処置に困っています。プルサーマルなる代物の炉はその苦肉の策の一つです。もし稼動が成って工場が全面的に放射能で汚染されてしまえば将来のその処理費は11兆円とも総額で19兆円とも言われています。税金浪費の極みです。燃料再処理に固執する理由をどこにも見出せません。

(明治大学名誉教授 当会顧問 玉川学園在住)



## 私のエコライフ

### 静かで排ガスゼロの電気自動車

豊吉 重充

福島第一原発事故後、太陽光パネル発電を検討しましたが、残念ながら旧建築基準法の我が家は設置に予期以上のコストがかかることが判明し、挫折…。しかし、この機会になんらかのエコロジー協力が出来ないものかと、ガソリン車から電気自動車に切り替えた次第です。

坂が多く、ガソリンスタンドが無い玉川学園地域での走行にも不便なく使用しています。ガソリン車に比べ出足良く、ガソリンスタンドに通うことも無く、自家給電で済ましています。



エンジン音が無いので歩行者の方々が当車の接近に気付かない危険を案じていたのですが、運転者には聞こえない何らかのシグナルが出ているのか、当車の接近を歩行者の方がたは察知してください。外観からはガソリン車と変わらず、後方から見て排気管(ダクト)が無いなあと違いに気付くぐらいです。



経済性の面では、ガソリン代に替わって毎月の電気代がかさむかと思いきや、当車購入前と殆んど変わらないのに首をかしげるほどです。ハイブリッド車も同じかもしれませんが、自動車税が五年間免除なのも助かります。

ですが、私の脳裏から離れないのは、当車の充電が東京電力に依拠していることです。何か小型の太陽光パネルで給電できれば溜飲が下がるのだが、と模索したりしています。(東玉川学園在住)

#### 【編集後記】

- ◇ この世をばわが世とぞ思う安倍首相
- ◇ アベさんの無知は真<sup>まこと</sup>かフリだけか?

発行：原発を考える会・玉川学園  
<http://genpatsuwokangaerukai.jimdo.com/>  
 代表：八木 ともみ  
[kusukusu-tomomo@willcom.com](mailto:kusukusu-tomomo@willcom.com)  
 顧問：藤井 石根 井野 博満  
 編集：浦谷 捷子(042-723-0979)  
 眞田 さち子 村上 功子 桃澤 洋子  
 武内 和美